

## 徳山ダムと「カメラばあちゃん」

日本最大の徳山ダムは構想から半世紀を経て、ほぼ完成してダム湖への貯水予定が秋に迫る。徳山村という一つの村を丸ごと水没させるダム建設は、公共事業のあり方を鋭く問いかける。

今年3月7日、「カメラばあちゃん」と呼ばれた増山たづ子さんが亡くなった。ふるさと徳山村を記録しようと、61歳から写真を撮り続け、ダムの完成を見ることなく逝ってしまった。ばあちゃんは10万枚以上の写真だけでなく、カセットにふるさとの「音」も記録していた。5月末に放映されたメーテレドキュメント「ふるさとの記憶～カメラばあちゃんの伝えたかったこと」は、長期にわたる取材を通して増山さんの活動を丹念に追う秀作である。番組から印象に残ったことを記しておこう。

増山さんは「ふるさとは心の宝」と語り、消え行くふるさと・徳山村を撮り続ける。写真を撮る増山さんの笑顔が忘れられない。草花の写真をとったあと、草花に語りかけるように「ありがとう」と頭を下げる。「カメラばあちゃん」が撮る人たちの表情は、なんとも明るい。増山さんは「お国のため」の戦争で夫や弟を失った。さらに日本最大のダム建設で「心の宝」のふるさとを奪われたのに、「お国のために」文句を言わなかった。

つい最近、大西暢夫『僕の村の宝物 ダムに沈む徳山村 山村生活記』を読んだ。初版は1998年だが、その改訂新版である。1991年から徳山を撮り続ける東京の若い写真家による記録であり、多くの写真が掲載され、じつに面白い。「徳山村がどんな村だったのか。そしてジジババがなぜこの深い山の中の村に残り続けたのか。それが知りたかった。」(プロローグ)

この本のなかにも、増山さんとの出会いが紹介されている。笑顔で写真を撮る増山さんの写真も載っている。増山さんの「ここにはなァ、まだ何人かの人が住んどる。それも自給自足でなァ」という一言が、大西さんを徳山村へ通わせることになったという。

(2006年8月23日 記)